八千代市萱田地区遺跡群の歴史時代土器

藤　岡　孝　司

1．はじめに

八千代市萱田地区は昭和52年度より継続的に調査を実施しており，歴史時代に該当する竪穴住居跡は5遺跡(註1)で総計500軒以上検出している。また，新川を挟んで対岸には，奈良・平安時代の集落で著名な村上込の内遺跡が控えている。萱田地区遺跡群と共に，旧下総国印旛郡村神郷に位置しており，一郷に存在する集落の解明にはかなり貴重な資料を提供していると言えよう。

すでに一部調査報告書を刊行している（註2）が，今後萱田地区遺跡群の全容が判明していく中で，地方村落の姿を浮き彫りにしていくことが，我々，特に調査に携わった者の責務であろうと考える。そこで，まず第一歩として，これまで提起した土器編年を再検討し，呈示しておきたい。

2．萱田地区土器編年の流れと問題の所在

房総歴史考古学研究会主催のシンポジウムの中では，北海道遺跡を取上げ，8世紀中葉から9世紀3四半期までを5期に区分した（以後，北海道編年とする）（註3）。

北海道遺跡は，所謂「箱形ロクロ土師器」と呼ばれる坏形土器の時期（II・III期）が他遺跡に比べ充実しているのが特徴であり，該期の土器資料も豊富である。また，下総地方の実年代の定点となり得る「承和五年二月□」の紀年銘墨書土器が出土したことでも知られている。したがって，これらに重点を置きながら土器編年を試みたものである。

しかし，そこでも触れたように，III期とIV期(「承和」年）とでは土器様相の差が大きく，スムーズな変遷は考え難い。したがって，その段階での課題として残った点であった。

その課題の解決の緒となったのが，井戸向遺跡である。当遺跡は9世紀代の資料が豊富であり，集落の変遷を考える上でも，非常に良好な資料と言える。III期とIV期の問題と同時に，北海道編年V期（9世紀第III四半期）より下る時期の土器様相を呈示することもできた（以後，井戸向編年とする）（註4）。

報文ではIV期をa，bに区分した。報文でも指摘したとおり，このa，bとはIV期の中の小期として捉えて設定したものではなく，皿形土器の有無によって，大きな画期として区別されるべきものであった。これは，皿形土器以外の器種において差が明確に捉えられなかったことに加えて，混乱を避けるために基本的には北海道編年に従う方法をとったためであった。

8世紀第II四半期から10世紀前葉までの土器の流れとしては井戸向編年でほぼ整ったと考えてよい。ただし，各期を個別に検討した場合，IV期の中にはまだ問題が介在していた。井戸向編年では，III期の中で古い様相と新しい様相があることを指摘し，北海道編年III期とIV期の間を埋める資料として位置付けようとした。しかし，全時期を通じて最も大きな画期として捉えられるのは，やはり皿形土器の出現であり，IVa期とIVb期の明確な区分が可能か否かが課題として残されていた。

そこで，次に井戸向編年IV期の問題について論じたい。

3．井戸向編年IV期の分析

土器の形態変化が最も顕著に認められ，かつ捉えやすいのは坏形土器である。そこで，坏形土器の分析を試みたい（註5）。

IV期の坏形土器は，井戸向編年の中でVIIa類に分類したものが大半を占める。そこで，VIIa類についてさらに詳細に検討を加えることにする。なお，資料操作の実施に際しては，まず皿形土器の存在の有無を前提とした。すなわち，IV期の中で皿形土器を伴出する一群は予めb期として扱うこととした。これは，井戸向編年の中ですでにa期とb期の違いを皿形土器の有無によって設定していることによるものである。

萱田地区遺跡群は複数の遺跡の集合体であり，各遺跡ごとに集落の立地，時期，出土遺物の様相（墨書土器，鉄製品など）などに違いが認められることから，まず遺跡別に傾向を捉えていくことにしたい。

各遺跡別に口径と底径の関係を捉えたのが，図1である。

この中で，傾向が最も顕著の現れたのは井戸向遺跡である。まず，底径はa期，b期共におよそ6.0〜7.5cmの範囲内に含まれ，差は認められない。ところが，口径はa期がおよそ11.7〜12.2cmであるのに対し，b期が12.0〜13.0cmと大形化している。また，これを補強する意味で集落の展開状況をみた場合，報文でも述べたとおり，a期の竪穴住居跡が第IV群に集中するのに対し，b期の竪穴住居跡は第I・II・III群に認められ，第IV群からはまったく姿を消してしまう。

この傾向を北海道遺跡と権現後遺跡に当てはめようとした場合，底径についてはほぼ一致するものの，口径についてはややばらつきが認められ，特に権現後遺跡ではこの図のみで傾向を捉えることはやや困難な状況と言えよう。

そこで，a期とb期における上記で示した口径の割合をみてみよう。ただし，底径が6.0〜7.5cmの範囲内のものを対象とし，またa期からb期への変遷が口径の拡大にあると考えられるため，口径枠についてはa期は11.7cm以下，b期は13.0cm以上を除外することにする。井戸向遺跡がa期75.0%，b期100%，北海道遺跡がa期70.8%，b期87.8%，権現後遺跡がa期70.7%，b期67.7%となる。やはり，権現後遺跡ではやや低い割合を示しているが，これは集落の存続時期に関連した事象とも考えられる。権現後遺跡は比較的短期に営まれた集落であり，その大半は井戸向編年IVa〜V期に比定され，すなわち，ここで問題としている時期と重複する（註6）。このように他遺跡と異なる状況下で現れた事象と考えることが可能ではなかろうか。

以上，井戸向編年IV期は，坏形土器の口径の差によっても区別できることが判明した。もともと皿形土器の出現という大きな画期がa期とb期の間に存在しており，坏形土器においても変化が認められたことによって，これより先，新たな時期区分をもって，対処していきたい。すなわち，井戸向編年のIVa期をIV期，IVb期をV期とし，以後一期ごとに繰下げ，VIII期をIX期とすることとしたい。

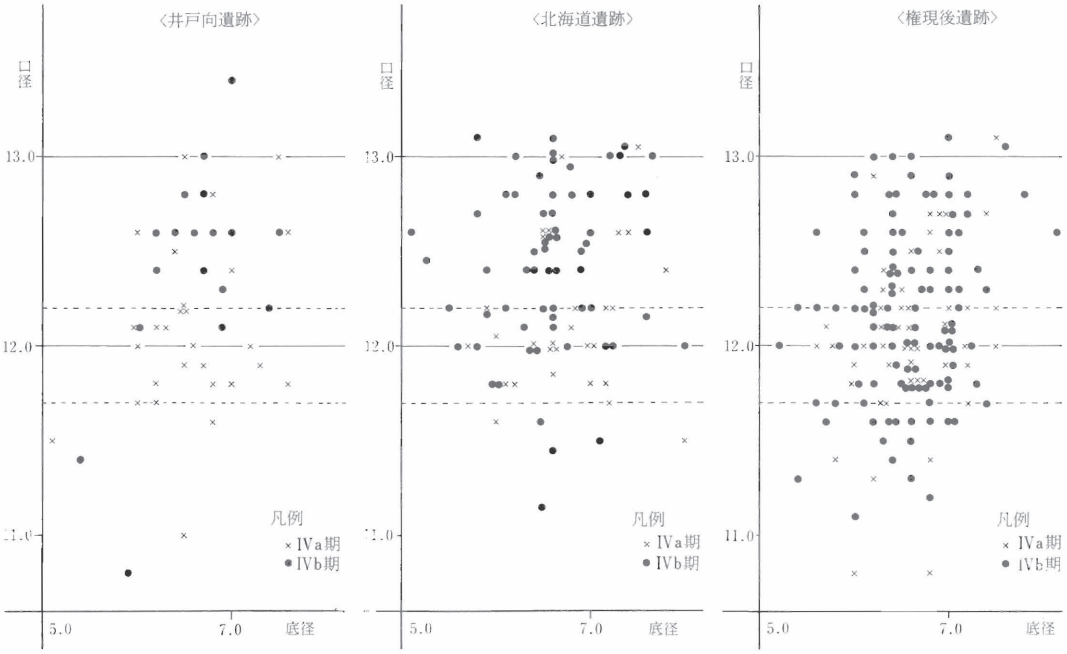


図1　井戸向編年IV期の法量分析

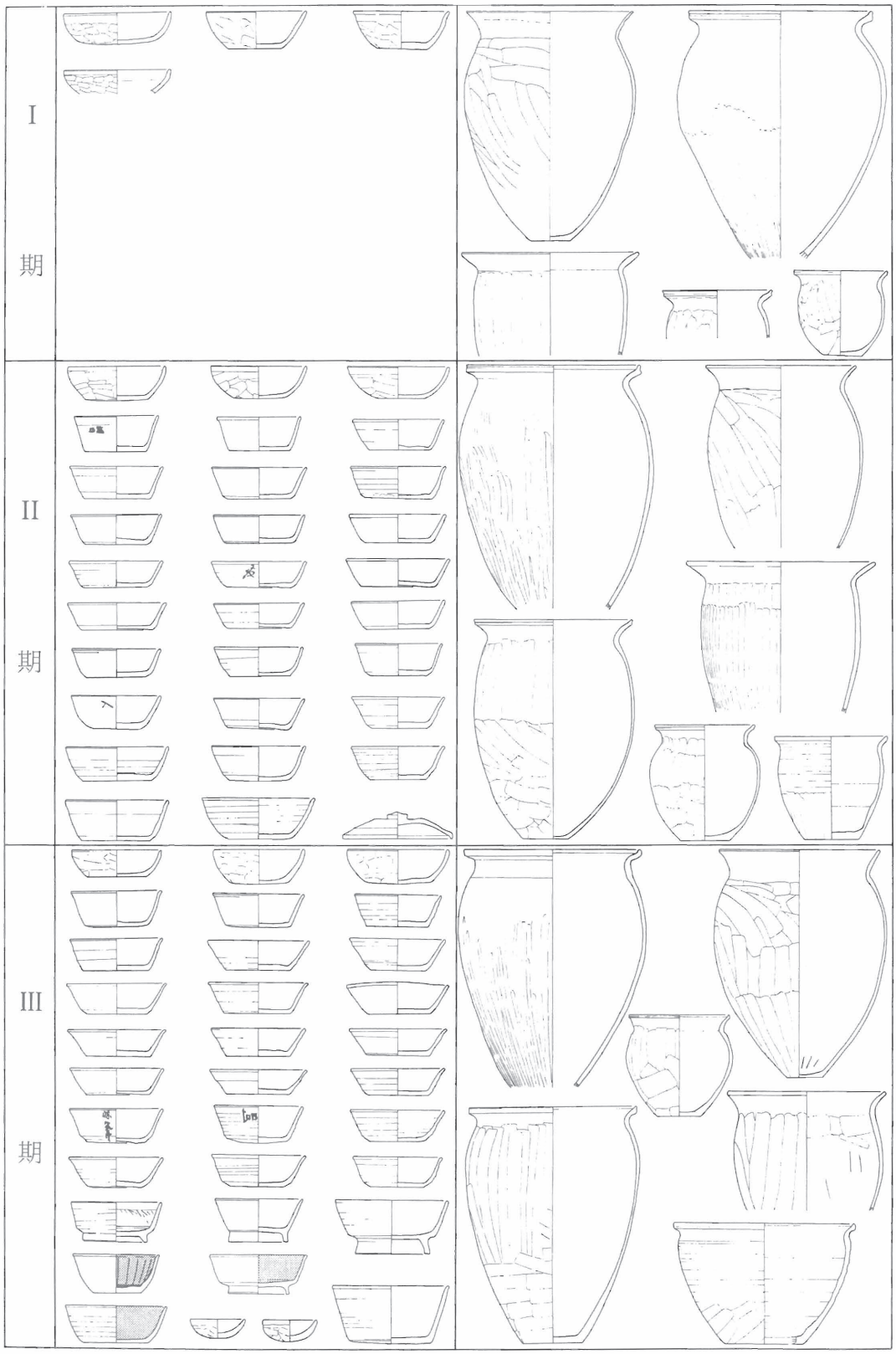
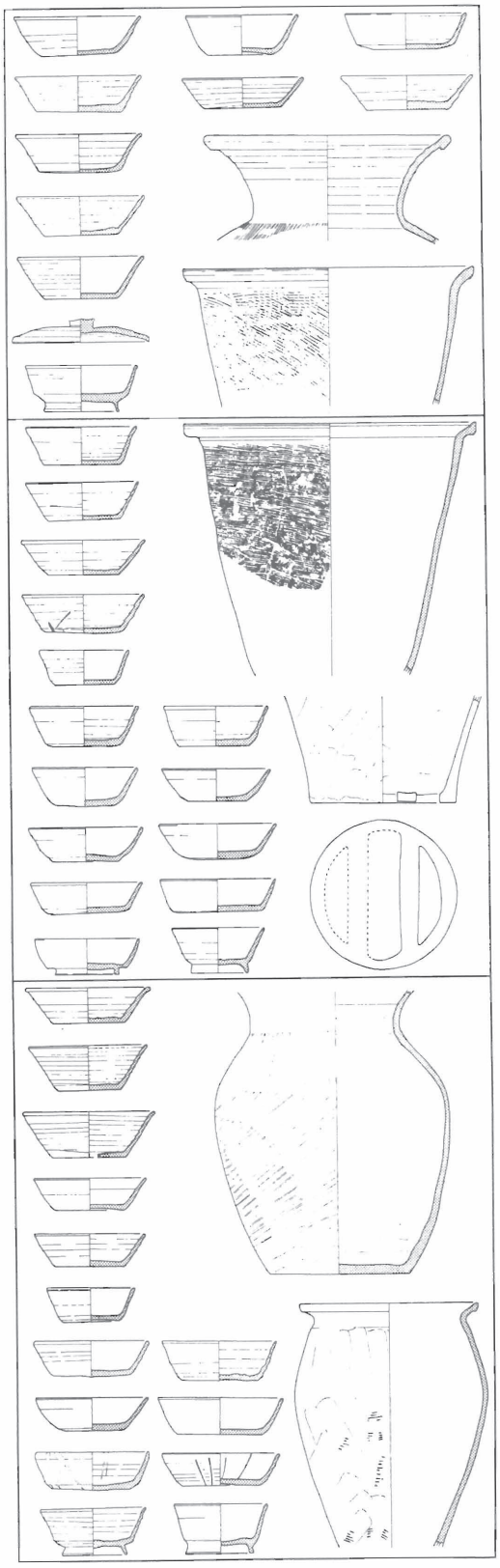


図2　萱田地区遺跡群歴史時代土器編年試案(1)　S＝1/8



4．萱田地区遺跡群の歴史時代土器編年試案

今回の修正案は，井戸向編年Ⅳ期に関わる部分であり，他期に関しての基本的な流れについては井戸向編年に変更はない。したがって，土器の分類等についても井戸向編年に準じる（註７）が，土師器坏形土器Ⅶａ類については先の分析のとおり，細分する必要がある。

Ⅶａ－１類（仮称）は，口径11.7～12.2cm，底径6.0～7.5cmで，口径の底径に対する比が1.8程度となるもの。Ⅶａ－２類（仮称）は，口径12.0～13.0cm，底径6.0～7.5cmで，口径の底径に対する比が1.9程度となるもの。として設定し，前者はⅣ期，後者はⅤ期の特徴として捉えたい。

以下，各期の土器組成の特徴を簡単に記述しておくが，詳細は井戸向編年に準じるため，井戸向編年を参照願いたい。

（Ⅰ期）

供膳形態に須恵器が盛行する時期で，大半を占める。前段階のタイプも含まれており，時期にやや幅を有する可能性がある。土師器坏形土器はすべてⅠ類で占められる。また，甕形土器Ⅳ類は，頚部が「くの字」に屈曲するタイプがみられる。

（Ⅱ期）

所謂「箱形ロクロ土師器」が出現する時期であり，土師器坏形土器の大半がⅡ類で占められる。また，供膳形態では須恵器よりも土師器の方が優位となり，Ⅰ類の占める割合も極端に減少する。甕形土器ではⅠ類が約５割を占め，小形なものではロクロを利用して整形するものも出現する。また，常総型土器にケズリの手法を取入れるⅡａ類の出現する時期でもある。なお，該期の資料としては北海道遺跡が最も充実しており，現在のところ権現後，井戸向遺跡には存在しない。

（Ⅲ類）

供膳形態において，土師器が９割を占めるようになり，須恵器は激減する。また，土師器坏形土器に内面黒色処理されたタイプが出現する。ただし，Ⅸｂ類の出現はさらに遅れ，当期ではⅨａ類に限定される。また，体部が直線的に立上がる高台付坏形土器もみられる。土師器坏形土器は，Ⅱ類から変化したⅢ類が主体を占める。基本的には体部下端にヘラケズリを施さないタイプであり，Ⅳ期以降と大きく異なる特徴である。言い替えれば，当期はⅡ期との関連性が強い時期と言えよう。

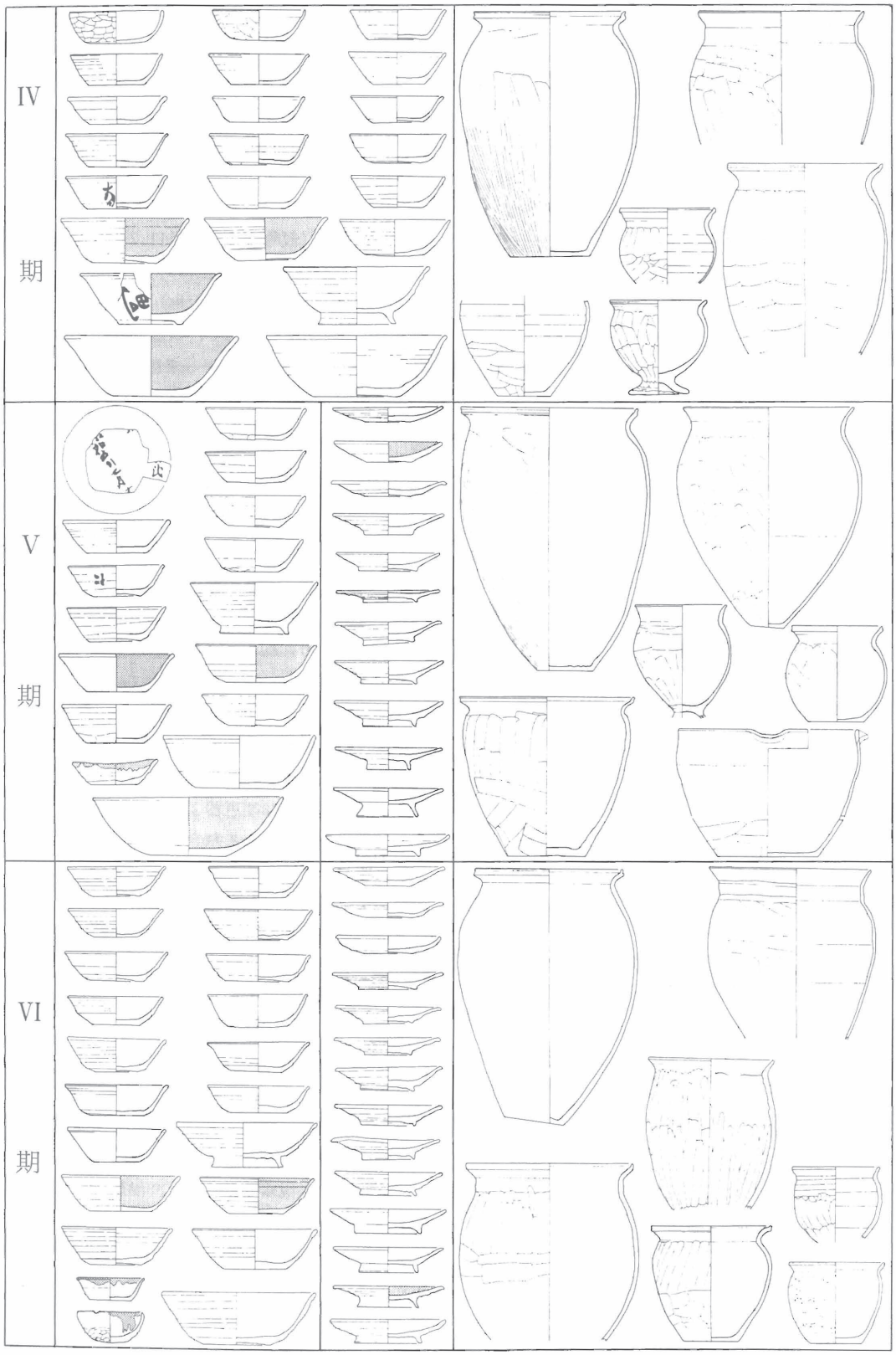
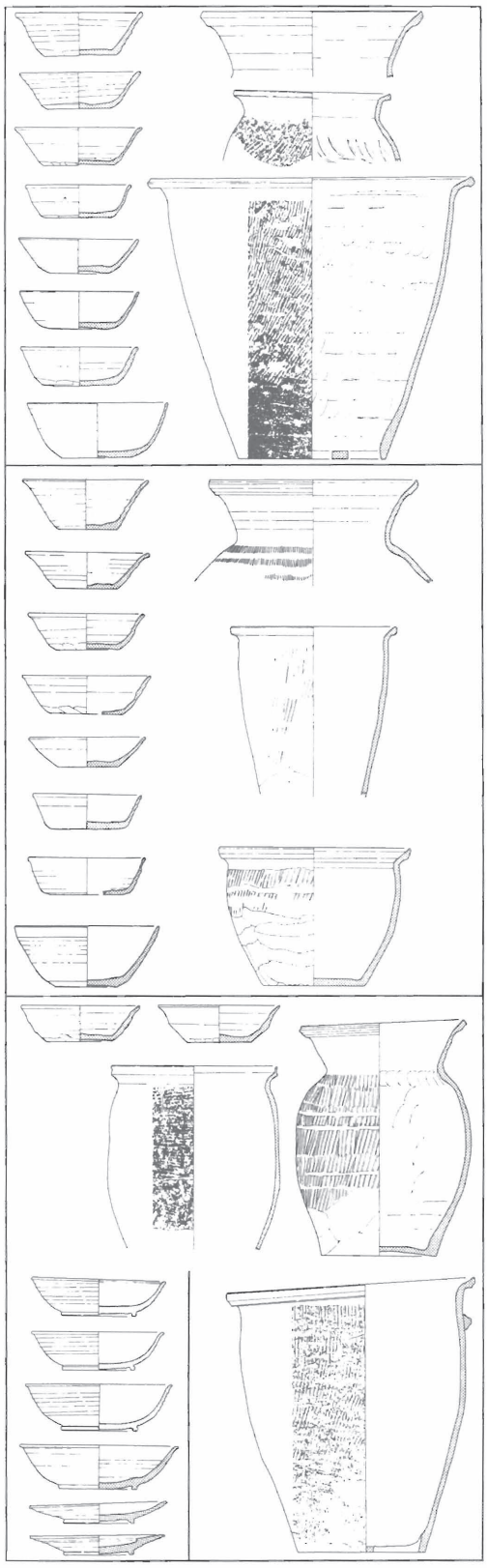


図3　萱田地区遺跡群歴史時代土器編年試案(2)　S＝1/8



（IV期）

土師器坏形土器VIIa－1類によって位置づけられる。また，土師器坏形土器Ⅰ類は当期をもってほぼ消滅し，以後すべてロクロ整形によるもので占められる。また，当期の特徴としては，土師器坏形土器IXb類の出現があげられる。IXa類と異なり，IXb類は形態的にほぼ統一（椀形）されているのが特徴とされるタイプである。土師器甕形土器IV類はIII期までと異なり，頸部が「コの字」を呈するタイプとなる。須恵器の伴出は先期と同様にやはり少なく，土師器に対して客体的な状況となっている。

（V期）

土師器皿形土器の出現が最大の特徴として挙げられ，当期は全時期を通じても最大の画期の一つとして捉えられる。有高台（張付け，造り出し）と無高台があり，それぞれ形態分類も試みたが，時期差を明確に捉えることはできなかった(註８)。ただ，有高台タイプは内面ミガキを施すのが一般的であるのに対し，無高台タイプは大半にミガキは施していない。なお，数量的には決して多くなく，１軒あたり１，２個体というところである。土師器坏形土器はVIIa－２類が主体的である。IXb類も引続きみられ，数量的にやや増加しているようである。なお，「承和」紀年銘の墨書土器の一括資料は当期に該当する。「承和」紀年銘の墨書土器は，形態分類上はやや特異なタイプとして捉えられるが，土器の特徴，セット関係など，該期として捉えて差支えないことは，すでに北海道編年，井戸向編年でも触れてきている。

（VI期）

土師器坏形土器がVIIb類にほぼ統一される時期である。IXb，IXc類についても存続するが，後者の割合が増してくる傾向にある。また，皿形土器については最も盛行する時期であり，１軒あたり複数を所有するのが一般的となっている。供膳形態として須恵器の割合は極めて少なく，希少である。甕形土器ではⅠ類がこの段階でほぼ消滅し，またIV類とした「武蔵型」もほとんど姿を消してくる。なお，権現後遺跡では，黒笹14号窯式と考えられる灰釉陶器が良好な一括資料として出土している。灰釉陶器の年代観はまだ定まったとは言えないが，当遺跡群における位置付けは確定される。

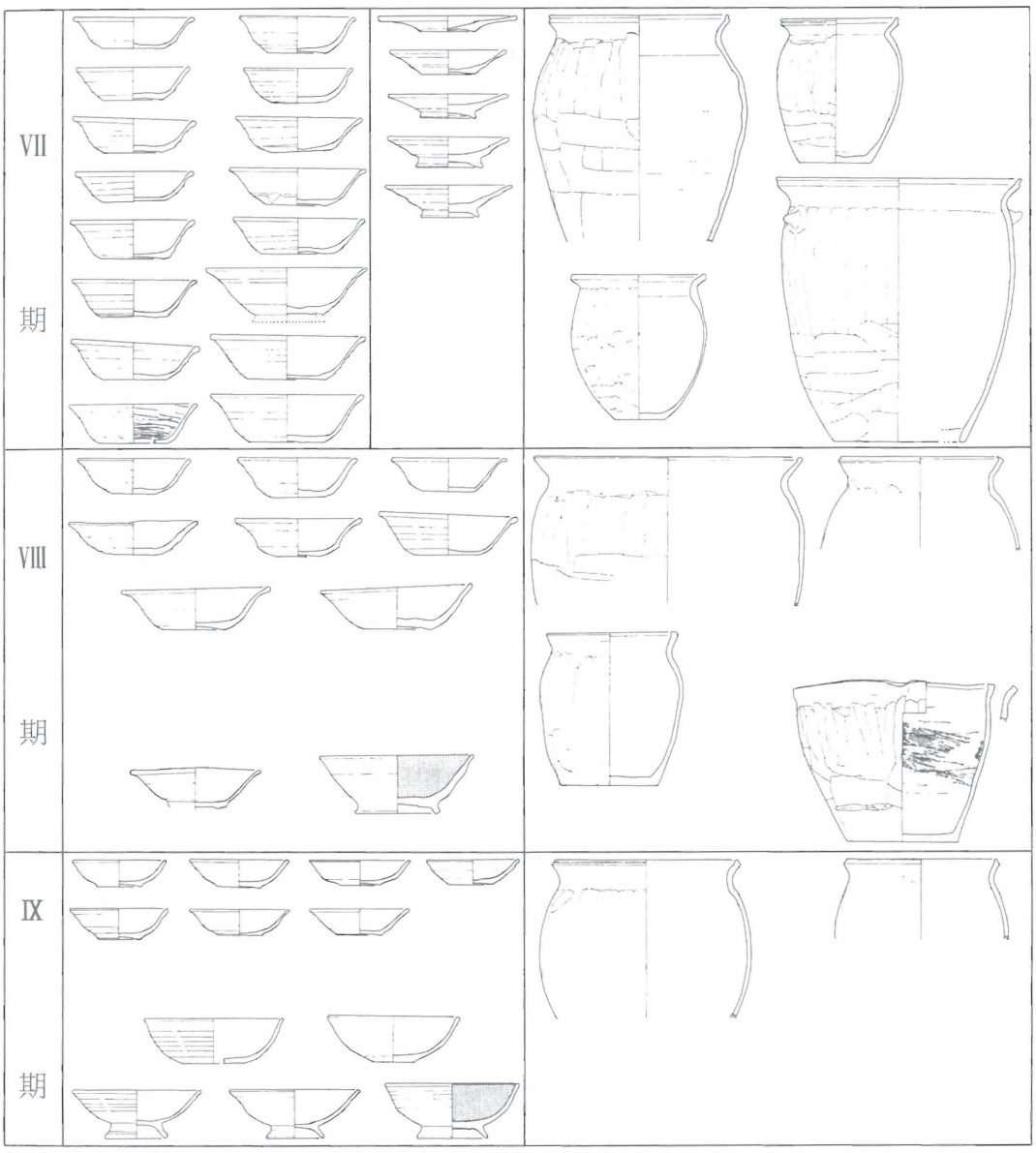


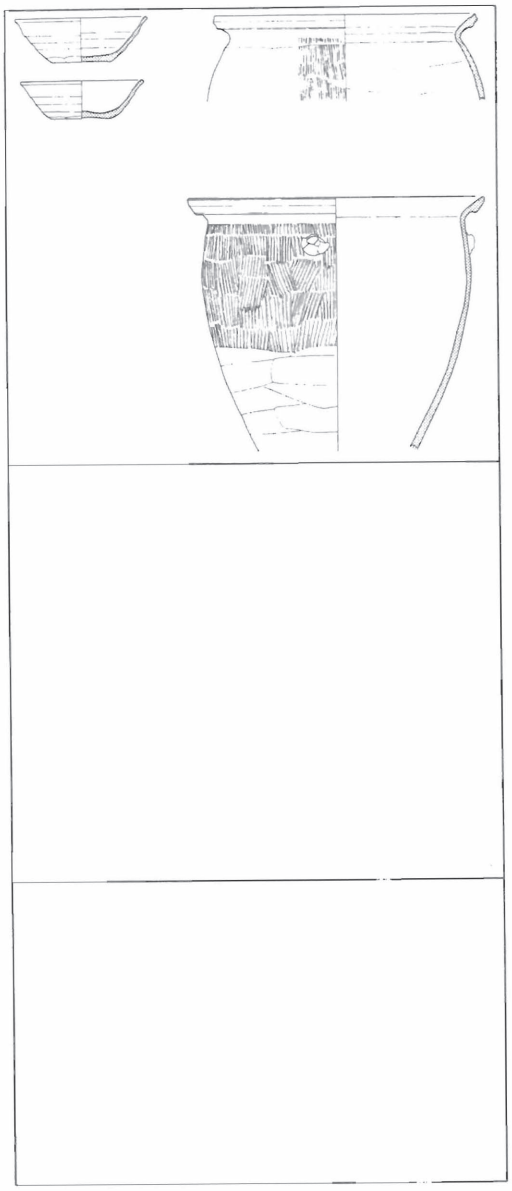
図4　萱田地区遺跡群歴史時代土器編年試案(3)　S＝1/8

（VII期）

当期の最大の特徴は，すべての器種において形態的な統一が成されてくることである。土師器坏形土器はVIIc類にほぼ統一される。IXb類はほとんど姿を消し，IXc類として存続する。土師器皿形土器は急速に減少し，当期をもってほとんど消滅する。また，土師器甕形土器で大形のものには，IV類も見られなくなり，IIa類に統一される。なお，須恵器は激減する。

（VIII期）

土師器坏形土器はVIII類にほぼ統一される時期である。また，体部が直線的に外方へ大きく開く高台付坏形土器が新しい器種として出現する。IX類は当期以降みられないが，この高台付坏形土器に一部黒色処理されたものが含まれる。一方，甕形土器にも大きな変化が現れる。IIa，Va類に代わってIIb，Vb類で統一される。これは製作上でも変化が認められ，前者が口唇部をつまみ出し状に仕上げるのに対し，後者は凸帯を内面に向け



て張付ける手法である。なお，皿形土器は基本的には存在しないようである。

（IX期）

該期の遺構は少なく，土器資料も貧弱である。住居跡は炉を有するものとカマドを有するものがあり，その上，土坑の資料も含めたため，すべて一期として一括して扱うには問題がないわけではない。VIII期とのつながりで捉えると，高台付坏形土器，甕形土器II b類が当期でも存在する。

5．実年代の呈示

実年代推定の根拠と成り得る資料は，旧下総国においては8世紀代に畿内産土師器，9世紀前半に紀年銘墨書土器がある。特に後者は年代を直接示す資料として注目されている。9世紀以降については，当地方にも少なからず持込まれている灰釉陶器が手掛かりになろうが，これについては年代観に今だ不確定要素があり，また消費地ゆえの年代のズレの可能性も認めざるを得ない。したがって，特に9世紀後半以降については今だ流動的と言えよう。

さて，現時点での房総における歴史時代土器の年代観については，すでに2度にわたるシンポジウムなどによってほぼ言い尽くされている。また，萱田地区の土器群についても，北海道編年及び井戸向編年の中で述べており，ここでは紙数の関係もあり，重複を避けて実年代推定の概略のみ記述しておきたい。

II期，III期のメルクマールとして特徴づけられる所謂「箱形」タイプの坏形土器は基本的には8世紀後半の土器として位置づけたい。

V期は皿形土器の出現期にあたるが，北海道編年IV期をIV期とV期に分離したことによって，井戸向編年で述べたとおり，V期が9世紀第II四半期の全般にわたるか否かは一考できよう。ただ，細分化することにさほどの意味はなく，むしろ北海道編年段階では坏－IX b類と皿形土器の出現期を同一として扱っていたが，前者が一段階早く出現していることを重視しておきたい。

VI期には，権現後遺跡においてK－14窯式に比定できる灰釉陶器の良好な一括資料が見られる。近年，K－14窯式は第II四半期に捉える考えもあり，そうするとこの萱田編年とはズレが生じるが，V期には紀年銘の実年代資料が伴っており，VI期をその直後，第III四半期あたりに位置づけることに誤りはないと考えている。消費地としての問題も絡むため，ここでは灰釉陶器を実年代の根拠としては扱わないこととして処理しておきたい。

以上，画期の年代を中心に簡潔に述べた。VIII期あたりから10世紀代に突入するのではないかと考えており，したがって萱田地区は8世紀第II四半期から10世紀代にわたる土器群の様相が流れとして明瞭になってきたものと考える。

6．今後の課題

旧下総国印旛郡の歴史時代土器の様相を含めた形で，課題として残った点を列記し，まとめに代えたい。

まず１つに，須恵器の問題がある。

萱田地区遺跡群では，常陸国及び上総国(永田・不入窯）に産地を同定できる須恵器が出土しているが，そのいずれにも同定できない一群の須恵器が，量的には少ないが認められる。所謂「土師質須恵器」などと過去呼称された土器である。しかし，千葉市中原窯をはじめとして，下総国の窯出土資料がわずかずつではあるが明らかになってきた現在では，それが下総産の須恵器であることにほぼ疑いはない。しかし，産地の同定には，さらに窯資料の増加，消費地での須恵器需要の実態などをつぶさにみていく必要があり，今少し時間が必要であろう。

萱田地区遺跡群では，全体に須恵器の出土が少なく，その中で下総産とされる須恵器はさらに少ない。その上，窯資料が増えつつある現在では，資料の見直しも必要となってきている。下総産須恵器については窯資料及び他集落資料を併せて今後充分な検討を要する。

また，上記以外に今一つ注目する須恵器がある。底部糸切り手法の須恵器である。８世紀後半から９世紀前半にかけて見られ，上総産とは考えられない一群がある。武蔵国（註９）に産地を求められると考えているが，再度の資料の見直し，対比が必要である。少ないながら，当地方における集落遺跡出土の須恵器の中では，比較的量的に目立っており，萱田地区遺跡群では先述した下総産のものと比較しても量的にはむしろ勝っている状況である。武蔵型甕形土器を比較的多く出土していることを考え併せると，当遺跡群と武蔵との関係にも注目したい。

次の課題として，ロクロ整形の甕形土器がある。小形のものと大形のものがあるが，出現の背景は異なるようである。

まず，小形タイプについてみてみよう。房総では，過去これを常に土師器として扱ってきている。また，今回この小論においても同様に扱ったが，昨年度の中原窯の調査(註10)において，２号窯より褐色を呈するロクロ整形の小形甕形土器が出土している。

萱田地区出土例の概要は，時期はII～IV期，色調は褐色で，調整は胴上半部はロクロ整形痕を残し，下半部はヘラ削りを施している。出現時期はロクロ整形の（箱形）坏形土器と同一で，出土例が少ないながら，時期は大半がこれと重複する。出現の背景についても何らかの関係を有しているかも知れない。また，最も重要な要素として，底部が糸切りによって切離されているものを確認している(註11)。中原窯をはじめとして，現段階での下総産とされる須恵器（坏形土器）は，基本的にはヘラ切りによって切離されており，甕形土器との違いはあるが須恵器とするには疑問が残る。

山梨，群馬などではいずれも須恵器工人による製作とされている(註12)。とくに山梨県下ではタタキ調整も施されており，還元焔焼成にも充分耐え得るものと考えられる。下総地方においても，ロクロ整形小形甕形土器が須恵器か土師器か，あるいは相方に存在するものなのか，出土の割合が低いことも考え併せて，可能な限り多くの資料にあたり，検討してみる必要があろう。

次に，大形タイプについてみてみる。IIｂ類ではヲサル山遺跡出土例によって，底部糸切り痕を確認しており，ロクロが使用されたのは確実である。その出現はVIII期である。それではそれ以前，すなわちIIａ類はどうであろうか。VII期の中で，底部破片に糸切り痕を有するものが数点認められるが，完形品はなく，出土状況も覆土上層である。また，他の例を見ると，底部に糸切り痕が認められないばかりでなく，ヘラケズリの痕跡もないことから，VII期以前，すなわちIIａ類にロクロが使用されたとは考え難い。したがって，大形品に対するロクロの使用は，IIａ類とIIｂ類の口唇部の製作手法上の違いとも関連した，甕形土器製作の大きな画期として捉えておきたい。また，現段階では須恵器がほとんど伴出しなくなった後に出現しており，IIｂ類については土師器として考えて差支えなかろう。

今後とも，ロクロ使用の甕形土器については，とくに小形品を中心として注目していきたい。

以上，須恵器を中心とした課題が主として残っているが，これらはいずれも萱田地区遺跡群によってのみ解決する問題ではなく，印旛郡，あるいは旧下総国の集落をつぶさに見て，検討していかなければならない問題である。

7．おわりに

あたかも現段階での課題を整理したかのように多くの課題を残してしまった。しかし，その大半は個別的な問題であり，流れとしての萱田地区の土器様相はほぼ整ったと考えている。

萱田地区遺跡群の対岸に位置する村上込の内遺跡では，すでに詳細な集落分析（主として墨書土器による分析であるが）が行われている（註13）。萱田地区遺跡群においてもしだいに全容が明らかになりつつあり，今後，この膨大な資料を整理し，分析していかなければならない。特に，下総地方では墨書土器が豊富なだけに，集落分析の中心がどうしても墨書土器に集中しがちである。もちろん，それが重要な位置を占めていることに違いはないが，同時に他（多）方向からの分析を試みることも必要であろう。

今回，編年案を呈示したのは，これら集落分析を行うための入口を開けたに過ぎない。

なお，郷堀英司氏，宮内勝己氏には日頃数々の御助言をいただいている。明記して感謝の気持ちとしたい。

註

1）権現後遺跡，ヲサル山遺跡，北海道遺跡，井戸向遺跡，白幡前遺跡をいう。他に，萱田遺跡群として包括できる遺跡に，池ノ台遺跡，川崎山遺跡，菅地の台遺跡がある。

森竜哉『市内遺跡群発掘調査報告』八千代市教育委員会　1989年

平岡和夫・大賀健『池ノ台遺跡』八千代市遺跡調査会　1979年

平岡和夫・大賀健『萱田町川崎山遺跡』八千代市遺跡調査会　1979年

2）a．阪田正一『八千代市権現後遺跡』1984年

b．阪田正一，藤岡孝司『八千代市北海道遺跡』1985年

c．藤岡孝司『八千代市ヲサル山遺跡』1986年

d．藤岡孝司『八千代市井戸向遺跡』1987年

以上，財団法人千葉県文化財センター

3）藤岡孝司「八千代市北海道遺跡（旧印旛郡）」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会　1987年

4）註2．dと同じ

5）土器形態分類は註2．dによる。

6）本論では，土器編年に主眼をおくため，集落分析については機会を改めたい。

7）土師器坏形土器IX類は，a類については形態的にも他の坏形土器と同一に扱っても良いと考えられるが，b，c類については系譜が異なるようで，形態的，手法的に椀形土器として別に扱うべきと考えている。ただ，ここでは説明上の混乱を避けるため井戸向編年に従っておく。

8）時期差を明確に捉えられないため，井戸向編年での分類は最小限に留めている。

9）宮内勝己氏の御教示によると，印旛郡での武蔵産と思われる須恵器は北武蔵が主体的なようで，萱田地区においても北武蔵に産地を求めておきたい。

10）関口達彦『千葉市中原窯跡確認調査報告書』財団法人千葉県文化財センター　1990年

11）底部が遺存しているもので，切離し技法の明確なものは一点のみで，他はヘラ削りが施されている。

12）a．保坂康夫「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」『山梨県考古学協会誌』第2号　山梨県考古学協会　1988年

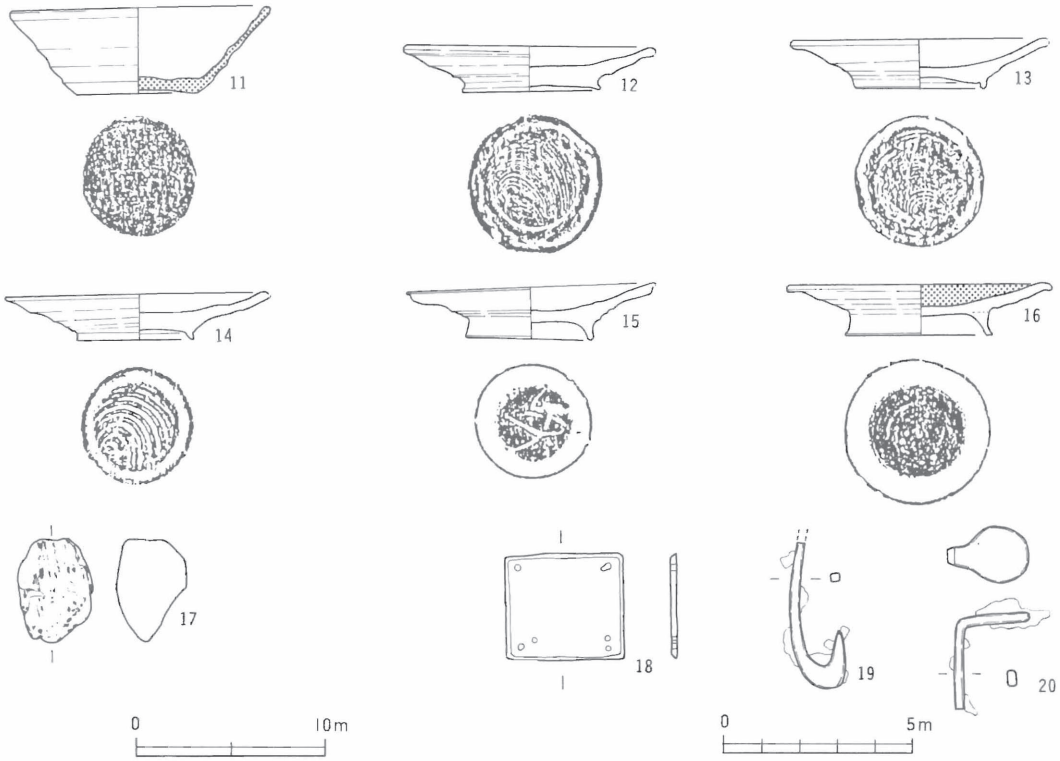
b．桜岡正信「ロクロ使用酸化焔焼成甕について」『研究紀要』7　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990年

a文献の中で「他地域のロクロ整形土師器甕の状況」として，千葉県北部の例が取上げられている。しかし，その中で扱っているのは「常総型」タイプのものであり，ここでの趣旨とはまったく異なるものである。したがって，山梨県下との比較についても触れられていない。

13）平川南・天野努・黒田正典「古代集落と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集　国立歴史民俗博物館　1989年

付記

『八千代市井戸向遺跡』報文中で，334ページ「図311　D031B号遺構出土遺物実測図(2)」の挿図が印刷，校正中の手違いにより一部の図が欠如していました。この場を借りて訂正し，正しい挿図を載せておきます。



（井戸向遺跡報文）　**図311**　D031B号遺構出土遺物実測図(2)